

# 鳥たちが見た新潟

◇1◇

「あなたの住む新潟は 五百四十二種とされている。新潟県ではそのうち 問われたら、あなたは、の三百九十三種が確認されている。言い換えれば、この雪国・新潟を「どんなところ」と伝えるのだ」「新潟は、日本の鳥の70%を見ることができ、ア東岸に位置する日本は、日本海を包み込むように、北から南へと弓なりに連なっている。日本は四季のある美しい国といわれる。日本列

打ち際に、シギの仲間の繁殖期には海辺から二千米の高山にまで幅広く生息する。まったく異なる環境に、なぜと思うだろう。ウグイスにとって生やすとなる、指標動物と

## 国内種の7割が生息

### 体を進化させ環境に適応

## プロローグ

島のほぼ中央に位置する新潟県は、とりわけ四季が色鮮やかに推移する地域である。これを鳥の生息と関連させてみるならば、雪国・新潟を見ていくのである。

日本鳥学会日本鳥類目録第六版によれば、日本で観察できる鳥の種類は、この季節、砂浜を散策する、生き生きと光る波

ネルギーを取り出す特殊な体の構造を進化させてきた。環境構造との関係は、山や川などの場所だけで決まっているものではな

どの小さな種から翼を広げると二倍以上、重さ五倍にもなるイヌワシやオシロウシなどの大きな種までさまざま。鳥が生きていくためには、固有の形態、大きさ、同種同士による連絡情報をとるための羽色模様は重要である。



まれ、東南アジア、オセアニアの海岸を目指す。数千の旅の途中で羽を休め、渚に群れをなし、気ぜわしくゴカイや甲殻類を捕食している。

山にはヤマドリなど山の鳥が生息し、形態がよ

川には魚を食べるカワセミなど川の鳥が

全長十一センチ、重さ十

して特殊化し、進化してきた。

夏季に山地などのササ

食して暮らしている。あ

と舌打ちにも似た声が聞

繁殖期を迎えたウグイスの雄はさえずりで縄張りを主張する

境との関係は、例えば、鍵と錠の関係にあたる。似たような無数の鍵があっても、ひとつの鍵は決まった場所（錠）しか開けることはできない。

出現する鳥の種類を見れば、そこがどのような環境なのかを知ることができる。風景を見れば、どんな鳥がどのくらい生息しているのか、また、季節による推移はどうかを推し量ることができ

石部 久

いしべ ひさし 阿賀町(津川)生まれ、動物生態学専攻、著書に「ヤマセミの飛ぶ渓谷」「小さなハヤブサの飛ぶ街」など。



成長できたと思います。の伝統を受け継いでいっ



# 鳥たちが見た新潟

◇2◇

今年も北の国から、ガ群れで飛来する。一方、区分している。夏鳥は、ンやハクチョウ、カモなどが群れをなし、越冬のため越後平野湖沼群をめぐり、十一月になってからようやく湖沼群に姿をみせている。

九月下旬には福島潟にヒシクイが、十月初旬には瓢湖へコハクチョウが、と毎年規則正しく、決まった時期に決まった場所へと飛来する。

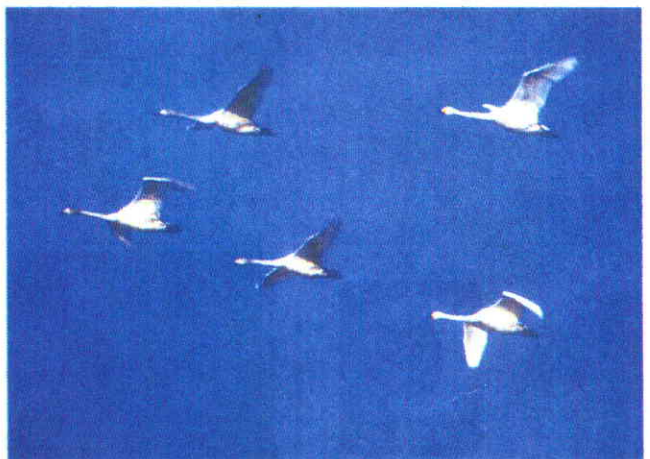
## 渡りの科学

新潟に飛来するハクチョウの種には、オオハクチョウとコハクチョウがいる。冬の使者として初めて紹介されるコハクチョウは、南のタイガの針葉樹林帯で繁殖するオオハクチョウよりも早く新潟にやってくる。北極圏ツンドラ湿地帯で繁殖するコハクチョウの南下は、氷結する極北を、寒さに追われることによりはじまること分る。

六月のツンドラで生まれた幼鳥を伴い、四千キロという長い空間を越え、二週間ほどをかけ、家族の



繁殖期に自分の縄張りを主張するオオルリ



コハクチョウは家族で行動する

行く先々に何とか生きていくための食べ物を見つけて出すことができる。

しかし、極北と冷温帯を行動域とするハクチョウたちにとって、旅をつづってきた。

こども食物が手に入るとは、越冬地までどこを飛行していいのかわからない。

# 食料求め越後平野へ

## 経路を学習 越冬地目指す

越冬地までどこを飛行していいのかわからない。

を、約五・五キロの重さをもち、親鳥七・五キロほどは同じ体形をもち、四千キロを自身で飛行する若鳥に成長させる。また、雪国の広葉樹の森は、オオルリの卵をほぼ一カ月で、青い海を飛ぶ体に変える資源をもっている。

それぞれの種にとって、必要な資源が存在する場所を地球規模で見つけ出し、まるで隣町に行くかのように数千キロの間を、翼を使って飛行する鳥の渡りは、地面を歩き、探索する私たち人、哺乳類とは大きく隔たっている。

個々の行動は不規則のように見える。しかし北半球をみると、資源をめぐる、多くの鳥は春に南から北へ、秋には北から南への大きな流れの中で、大移動を行っている。

湖沼が点在する越後平野は、ハクチョウたちが生まれた極北ツンドラの平原に似ている。

石部 久

(日本野鳥の会・日本鳥学会、藤塚小学校校長)



坂之上小と合同で行った春の道重全山古志小探検

ンティエの人かにはけまして

越地震でかなりのひがす

# 鳥たちが見た新潟

◇3◇

冬到来とともに、荒涼くちはしの太いシメも姿を見せる雪国特有の鳥の景色である。

鳥はなぜ群れるのか。群れの構成はどのようにしているのか。野外で群れに出合うたび、群れる利点は何を見続け

真っ白な雪が街をおお朝、ふと庭先を見ると見慣れない鳥に出合うことがあるだろう。なじみのヒヨドリやムクドリに加え、冬鳥のツグミや、シロハラ、漂鳥のルビ

タキなどが、庭の樹木・ピラカンサスや、ナナカマドに群がり、実をついばんでいる。ヒマワリの種などを置けば、ヤマガラが飛来し、ぶら下がって食べるなどの面白い行動をみることができ

鳥が群れをなしているかどうかは、集団の動き

群れる鳥の構成をみる知しがたく点在する食物

飛する鳥たちは、自身も果として群れは巨大なラ

## 群れと冬の暮らし

り、一羽一羽の動きがそ

る。鳥たちは、多くの眼で警戒にあたることにより、一羽で注意を払いながら食するときよりも、多くの時間を食物摂取に費やすことができ

また、群れはその年生まれた多くの若鳥たちで構成されている。経験の不足している若鳥が自然界に生き抜くため、情報を取り入れ、他を模倣し、学習する大切な学びの場でもある。個々は群れで暮らす集団での学習により、多くの生きる力を獲得していくのである。

# 多くの眼で生命を守る

## 食物、外敵察知確率が向上

いくことはできない。群きの強い様子は見事である。真っ白で平たんな雪が摂食場所を見つけることなど決してない。原にも食物を探さなければならぬが、困難は多を得ることができ

た、荒涼とした平野に植を隠し逃避する。個々が群れの中に隠れようと

石部 久

日本野鳥の会・日本鳥学会、藤塚小学校校長



ヒマワリにぶら下がり実った種を食べるヤマガラ(シジウカラ科)

グビーボール状になり、より密集して飛行する。捕食者は、群れる多数の鳥たちをまえに、同じ形状のどの鳥に狙いを定めればいいのか混乱し戸惑うに違いない。ハヤブサやタカたちは攻撃しながら、瞬時に獲物を見定めている。群れからはみ出し同調行動に遅れた個体や、形や色の違う個体が、猛禽類たちの攻撃対象となる。群れなければすぐに捕食者に襲われる結果となってしまうだろう。



# 鳥たちが見た新潟

◇4◇

と期いの一佐のら寄 今、日本はとても豊か

はだめだと思ひ、今年は、たいです。 のことを考える機会が増

雪国新潟の山間地は樹木を埋め尽くす雪に覆われ、起伏ある一帯は凜として動物の気配を感じさせないほど静寂が漂っている。

雪原に分け入り、時間をかけて探していくと、生き物たちの痕跡をあちこちに見ることができ

る。かん木の根元を出入りし、山の斜面を駆け上ったノウサギの足跡。キツネの列に点々と続く足跡。ニホンリス、テン、ヤマドリなどのつめ痕

## 冬に生きる

かに残り、息せききって樹林を駆け抜けた彼らの躍動が伝わってくる。 上昇気流が発生する時刻には、雪山を背景に大きなワシが飛ぶ。特殊鳥類のクマタカである。クマタカは、イヌワシととも現れるクマタカは、翼下面に特有の黒いしま模様がある美しいワシである。

# クマタカを支える森

## 捕食動物も生息しやすく

た森林地帯に生息する南方系のワシであり、日本はクマタカの北限にあたる。山間地の人里にも現れるクマタカは、翼下面に特有の黒いしま模様がある美しいワシである。

「重なり飛行」ディスプレイである。山間地の冬で練り広げる円舞にも似た飛行は豊かな山の環境を象徴するかのようにも見えてくる。

この地域のクマタカ個体群は、それぞれ約二十平方キロほどと、大型のワシとしては狭い行動圏で周年離れることなく暮らしている。特定の種を狙うのではなく、利用できる動物なら何でも捕食する食性によって、小さな範囲でも生きぬくことができるのである。森のあ



ウサギを捕らえて飛行するクマタカの雌(撮影・岡田成弘)



クマタカの重なり飛行(撮影・岡田成弘)

大きな違いがあること。アカネズミ、ニホンリスなどの小型動物から、タヌキ、アナグマなど中型動物まで、一帯にすむあらゆる動物を捕食している。まるで豊が空を飛んでいる感じが分る。自然界では小さなものほど個体数も多くなる。クマタカは雌雄の大きさの違いを生かし、雌は機敏な動きで積極的に林内を飛行し、小さくより多くの動物種を探餌している。クマタカを山地生態系の頂点として、雪山の動物群集の躍動が続く限り、生き物たちを大きく

この地域のクマタカ個体群は、それぞれ約二十平方キロほどと、大型のワシとしては狭い行動圏で周年離れることなく暮らしている。特定の種を狙うのではなく、利用できる動物なら何でも捕食する食性によって、小さな範囲でも生きぬくことができるのである。森のあ

食して生きている。新潟の山地帯には両種が同じある地域を調査地とし、雪山の奥深くから山に重なるように飛ぶ、繁殖期開始求愛行動を表す、足指を絡ませ合ったりし、重なり飛行から雌雄の

なれ 組織 万能



# 鳥たちが見た新潟

◇5◇



捕らえた魚をくわえ、巣穴(右上)の壁に運ぶヤマセミ

八十円通常切手に描かれています。これが日本に四季を通して生息する数少ない鳥の名前を知っていますか。その鳥は、い鳥・ヤマセミです。頭に冠のような長い羽飾りを持ち、嘴は太く長く、白と黒の斑模様も体が大きく、山の溪流様をした羽毛を持っています。一日に五〜八匹を捕食します。

## 5千万年の旅

# 地球一周し寒を克服

## ヤマセミはぐくむ好条件

むカワセミ科の祖先は、暖かな南の国に起源を持つのに、なぜ雪深い新潟県に多く見られるのでしょうか。ヤマセミの祖先は四千万年前に、ニューギニアなど東南アジアに生活するシウウビンの仲間だったとされています。彼らは樹木などに止まり、地上を往來するトカゲや、ネズミなどを待ち伏せして生きていました。五百〜一千万年前に、その嘴は、瞬時に大きな力が出せることを表します。俊敏な魚を捕らえ、岩に打ち付けて殺してかまセミとなりました。それが北アメリカから中央アメリカ、南アメリカへと進むことを可能にしたのです。

いが、流域沿いに四千万年の広い縄張りを持ち、厳冬期も行動圏から出ることもなく生活しています。イワナ、ヤマメ、カシカ、ウグイなどを狙います。一日に五〜八匹を捕食します。繁殖期には、川にほど近い急傾斜の崖に、嘴で巣穴を掘り、四〜六羽の雛を育てます。魚が容易に捕れる川、天敵に巣を襲われにくい崖が行動圏に必要なため、ヤマセミの生息数は限られ、姿を見ることは難しいのです。

しかし、本県ではヤマセミを見るのが意外に多く、特に厳冬期には観察が容易です。調査地として魚野川支流や常浪川などでは、山間地流域の四、五におきすぎ間なくヤマセミの番がみられます。そのシウウビンの中、南下、二百〜五百萬年前に、川の魚を主に捕食するものが現れ、それがカワセミとして進化していきました。そして地上の餌から水中の魚に餌を求めた。そのシウウビンの中、南下、二百〜五百萬年前に、川の魚を主に捕食するものが現れ、それがカワセミとして進化していきました。そして地上の餌から水中の魚に餌を求めた。そのシウウビンの中、南下、二百〜五百萬年前に、川の魚を主に捕食するものが現れ、それがカワセミとして進化していきました。そして地上の餌から水中の魚に餌を求めた。



川の魚をねらうヤマセミの雄。白と黒の羽模様を雪景色にとけ込んでいる

し、存在を誇示するのは、ヤマセミは、カワセミ科の中では最も新しい種として、東アジア東岸の森林に縁取られた河川に出現し、現在に至っています。そして雪が多くの流れを生み出し、自然の崖をつくり、流域の魚を育てている、私たちの住む新潟の自然が、生存の絶好の条件となり、ヤマセミはぐくんでくれています。

石部 久

(日本野鳥の会・日本鳥学会、藤塚小学校校長)

でも目標に近づけるよう

に報われるというところを、どの行事にも一生懸命